

第1回海外ネットワークに関する万国津梁会議 議事録

日 時：令和2年7月28日（火）13：00～15：00

場 所：沖縄県市町村自治会館4階第2・3会議室

出席者：小川 寿美子 委員長、新垣 誠 副委員長、安里 三奈美 委員、
新垣 旬子 委員、新垣 秀彦 委員、佐野 景子 委員
佐久田トニーWUB ネットワーク副会長

（事務局）ただいまから、海外ネットワークに関する万国津梁会議を開催させていただきます。委員長が選出されるまでの間、進行を務めさせていただきます、沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課の前本と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、会議の開催にあたり、沖縄県知事からご挨拶がございます。知事は本日、業務により参加がかなわなかったため、沖縄県文化観光スポーツ部の立津参事から代読させていただきます。立津参事、よろしくお願いいたします。

（立津さとみ 沖縄県文化観光スポーツ部参事）本日の海外ネットワークに関する万国津梁会議開催にあたり、知事挨拶を代読させていただきます。

はいさい ぐすーよー ちゅーうがなびら。

本日は御多忙の中、海外ネットワークに関する万国津梁会議に御出席いただき、感謝申し上げます。また、皆様におかれましては、委員への就任を快くお引き受けいただき、厚く御礼申し上げます。沖縄県では、沖縄21世紀ビジョンに掲げる将来像の実現及び新時代沖縄を構築するための更なる施策展開に向けて、有識者から意見を聴取する万国津梁会議を令和元年度に設置しております。今年度は、昨年度の沖縄県振興審議会において重要性を増した課題として挙げられたものの中から、「海外ネットワーク」をテーマとして選定し、本会議を新たに立ち上げました。「ウチナーネットワーク」につきましては、海外の県人会において世代交代が進む中、若者の県人会活動等への参加が減少傾向にあるなど、ウチナーンチュとしてのアイデンティティーの低下等が懸念されているところでもあります。また、一方で、ウチナーネットワークの今後の展開としましては、国際的なビジネスネットワークへと発展したWUB（ワールドワイド ウチナーンチュ ビジネス アソシエーション）や沖縄県海外事務所などの活用も広く検討することで、沖縄経済の自立的発展にも繋がる可能性を秘めているものと期待しているところです。沖縄県としましては、21世紀における「万国津梁」

の実現と新時代沖縄の構築に向けて、施策展開の礎となる提言を賜りたいと考えております。委員の皆様におかれましては、これまで継承されてきたウチナーネットワークの検証と今後の新しい展開について、幅広くご議論頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

ゆたさるぐとう うにげーさびら。いっペー にふえーでーびたん。

令和2年7月28日 沖縄県知事 玉城 デニー

代読でございました。

(事務局) 立津参事、ありがとうございました。立津参事は別用務のため、ここで退席させていただきます。

続きまして、御出席の委員の皆様から、自己紹介を兼ねてご挨拶をお願いしたいと思います。なお、1人1分程度でお願いしたいと思います。まず初めに、新垣句子委員からお願いしたいと思います。

(新垣句子委員) 新垣通商の新垣句子です。本日はお役に立つよう頑張りますのでよろしくお願い致します。

(新垣秀彦委員) 金秀本社の新垣といいます。いただきました委員名簿に、元県知事公室広報交流統括監、商工労働部産業雇用統括監ということで、民間の経験よりも県の行政の経験が長い。そういうことも踏まえて、今回委員の指名になったと思っています。久しぶりに県庁の皆さんと仕事できるので、お役に立てるように努めていきたいと思っています。よろしくお願い致します。

(小川寿美子委員) 名桜大学人間健康学部で教授をしております、小川寿美子と申します。私の専門はもともと公衆衛生学、国際保健という分野です。約5年前から、名桜大学の山里学長のイニシアチブのもと、人の移動研究、つまり移民研究を、大学全体を挙げて行う試みがなされ、その時に私が北米班を担当しました。それが縁で、人の移動、特に北米のウチナーンチュについて研究する機会を得ました。また、一昨年から、科学研究費「島嶼女性の主体的移動と現代社会に与えたインパクトに関する研究」へと発展しています。その他、21世紀ビジョン基本計画の審議会委員として幾つかの部会に出席させていただく機会を得ました。そこでは沖縄にウチナーンチュの拠点となる「場」を作るべきだと、強く発言させていただきました。それも含めて本会議で検討する機会となればいいなと思っています。よろしくお願い致します。

(新垣誠委員) はいさいぐすーよー。新垣誠やいびん。3人目の新垣でございます。よろしくお願いします。私は大学大学院と、カリフォルニアで学んでいまして、その時に、北米の沖縄県人会の方々に、孫や子供のようにお世話になって、今回は、その恩を返すべく頑張りたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

(佐野景子委員) JICA 沖縄所長の佐野と申します。JICA といいますと、もっぱら開発途上国への国際協力が中心ですけれども、たどっていきますと、海外移住事業団も、私どもの、もともとの組織になりますので、日系社会支援というのも大事な仕事として、脈々と続いております。その中では県系の皆さんが、各地でご活躍されていることをよく知っておりますので、そういったところでも我々の事業として支援できることがないかと思っていたところですので、今回この会議に参加させていただくのは非常に嬉しく、光栄に思っております。どうぞよろしくお願いします。

(安里三奈美委員) 世界若者ウチナンチュ連合会理事をしております、安里三奈美と申します。2011年の第5回世界のウチナンチュ大会において、若者のネットワーク構築が成果としてあがりました。その後も、当会では若者のネットワーク構築や世代継承に力を入れて活動をしてきております。次第の報告の中で、当会の活動報告をいたします。海外ネットワークの今後の新しい展開について尽力できればと思っております。オンラインでの参加で大変恐縮ではありますが、今日はよろしくお願いします。

(事務局) ありがとうございました。現在ボリビアは深夜帯だと思えますけれども、安里三奈美委員よろしくお願いします。続きまして、委員長、副委員長の選出に移りたいと思えます。お手元に配布しております資料3に万国津梁会議の設置要綱がございまして、第5条に、委員長、副委員長を置く規定がございまして、委員長、副委員長につきましては、大変恐縮でございますけれども、事務局の方からご提案させていただいてよろしいでしょうか。

(複数の委員) はい。

(事務局) はい、ありがとうございます。海外ネットワークに関する万国津梁会議におきまして、委員長に小川寿美子委員を、副委員長に新垣誠委員をご提案させていただきたいと思えますが、それでよろしいでしょうか。

(複数の委員) はい。(拍手)

(事務局) ありがとうございます。それでは小川寿美子委員を委員長に、新垣誠委員を副委員長に選出したいと思います。ここからの進行は、小川委員長にお願いしたいと思いますのでよろしくお願いします。

(小川寿美子委員長) それでは、私の方で委員長を務めさせていただきます。進行に先立って、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。先ほど、立津参事から、代読で玉城デニー知事のご挨拶を承りましたけれども、今回の海外ネットワーク会議が、21世紀ビジョンで策定された五つの目標に対する一つの目標を成就させるための使命を持っております。海外ネットワークという名称での委員会ですけれども、私自身の理解としましては、まず、近々の目標としましては、来年度開催予定の第7回世界のウチナーンチュ大会をどのように盛り上げるか、もしくはどのように今後継続させていけるような、いい形でまとめることができるかというようなことも議論できればと思っております。皆さんのお手元の資料にあるような、本会議で議論すべき「課題」は、第6回の世界のウチナーンチュ大会を終えて分析された結果が書かれているようですので、その「課題」についてそれぞれの委員の先生方の思うところ、またそれが本会議で取り上げる「課題」であるのであれば、どのように解決していけばいいのかという点を、皆で知恵を出し合って、まとめていきたいと思っておりますので、どうぞ協力のほどお願いいたします。

議事に移ります前に、本会議の公開のあり方について、会議の全部を公開することとし、会議開催後は事務局で、議事録を作成し、県のホームページにて公表することとしたいと思います。いかがでしょうか。よろしいですか。

(複数の委員) はい。

(小川委員長) ありがとうございます。また議事録において、委員の名前を述べずに、委員A、委員Bというふうにするか、もしくは委員名もきちんと記載するか、方法があるかと思っておりますけれども、特に差し支えなければ委員名をA、Bとせず、委員名を記載した形の議事録としたいと考えておりますが、よろしいでしょうか。

(複数の委員) はい。

(小川委員長) ありがとうございます。それでは議事に移ります。初めに、事務局から会議の進め方等について説明していただきたいと思っております。事務局の方、どうぞよろしくお願いします。

(事務局) 交流推進課の大城と申します。恐縮ですが、着座にてご説明をさせていただきます。

県におきましては、万国津梁会議について、資料3の設置要綱の第1条に基づき、沖縄21世紀ビジョンに示されております、本県の目指すべき将来像を実現し、新時代沖縄の構築に必要な施策の推進を図るために会議を設置することとしております。今年度の新たなテーマとしまして、海外ネットワークに関する万国津梁会議を立ち上げたところでございます。資料4をご覧ください。冒頭、知事からの挨拶でも述べさせていただきました通り、海外在住の県人会の世代交代とともに、若者のウチナーンチュとしての意識低下などの課題がある中、本会議において、ウチナーネットワークの検証と今後の展開についてご議論いただきたいと考えております。

資料5をご覧ください。こちらが会議の開催スケジュール案でございます。本日の会議も含めまして、今年度は4回程度開催の上、知事にご提言をしていただくこととしております。本日の第1回会議におきましては、主に県の取り組みや、海外ネットワークの発展に資する活動のご説明をさせていただきます。第2回会議におきましては、各委員の皆様からのご意見をいただいた上で、討議を行っていただきたいと考えております。

第3回及び第4回会議におきましては、知事への提言書案について議論をいただきたいと考えております。

事務局からの説明は以上です。

(小川委員長) ありがとうございます。引き続き、次第に沿って進めさせていただきます。まず、県の取り組みとして、世界のウチナーネットワーク、県海外事務所等のネットワークについて説明していただきたいと思っております。

その後、ネットワークの次世代への継承について、安里委員からの説明、そして、WUBネットワークについて、WUB 沖縄の佐久田トニー副会長から説明していただければと思っております。

その後休憩を挟んで、委員の皆様からの意見交換を行いたいと思っております。

まず、それでは、県から、世界のウチナーネットワークについて説明をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

(大城友恵 沖縄県交流推進課交流推進班班長)

資料6-①、資料6-②について、資料に沿って説明。

(小川委員長) 大城班長どうもありがとうございました。続きまして、県から、県海外事務所等のネットワークについて説明をよろしく申し上げます。

(久高将匡 沖縄県商工労働部アジア経済戦略課戦略推進室主幹)

資料7について、資料に沿って説明。

(小川委員長) ご説明ありがとうございました。今資料6、そして資料7と、県の方からご説明がございました。何かこの資料の中で、補足して説明していただきたいという部分がありましたら、委員の方から挙手をしていただければと思います。

【特に発言なし】

(小川委員長) 私から、商工労働部アジア経済戦略課の資料7でご説明していただきたいと思うことがございます。3ページ目、海外事務所のネットワークということで、いくつかの事務所を持っていらっしゃるということですが、規模としてはどのぐらいのものでしょうか。

(アジア経済戦略課 久高主幹) ご質問ありがとうございます。先ほど申し上げました通り、海外事務所は設置ということで、事務所組織自体がございまして、委託駐在員については、配置ということで、実際に現地で勤務されている方お1人のみを組織として、各種施策をやっているところです。

事務所の規模としましては、県から所長が派遣されていまして、現地の事務所のスタッフを合わせて、多いところでは、7名ですとか、少ないところでは3名となっています。

(小川委員長) わかりました。ありがとうございます。他に委員の先生方から、何かございますでしょうか。またご質問がございましたら、後ほどでも承りたいと思います。

続きまして、ウチナーネットワークの次世代への継承ということで、世界若者ウチナーンチュ連合会の設立者・理事の安里委員から説明をお願いできればと思います。安里委員よろしくをお願いします。

(安里委員) 資料8をご覧ください。私たちがウチナーネットワークの次世代への継承について取り組んできたことを抜粋して5つ書いております。1つ目として、海外の若者ウチナーンチュを束ねる団体として、世界若者ウチナーンチュ連合会を、2011年の第5回世界のウチナーンチュ大会を機に設立しました。設立の背景は、これまで長年大きな課題となっていた、次世代への継承の解決です。そのとき若者国際会議を実施し、7カ国から代表者が参加しました。その後、代表者が国に帰って、組織を立ち上げて、ネットワーク構築と発展を目的として活動しております。

2つ目は、2011年の翌年2012年から行ってきた活動です。次世代継承、ネットワークの構築を大きな目的として、世界若者ウチナンチュ大会を実施してきました。

2012年から2016年の5年間、次世代継承を最大の課題と捉えて毎年開催しております。南米、北米、ヨーロッパ、アジア、沖縄、と各大陸を回ってネットワークを広げていく活動をしています。南米はウチナンチュの県系人の割合が多く、南米・北米の大会は多くの若者が参加しておりました。ヨーロッパ、アジアに関しては、元々県系人の割合が少ないので参加人数は少なかった大会ではあったものの、ヨーロッパ内など若者をつなぐ成果を出すことができました。2017年以降は、毎年ではなく、2年に1回開催しています。2018年に南米ペルーで実施しまして、2年後の2020年に台湾で実施予定でしたが、新型コロナウイルスの関係で大会は中止ということになりました。その他、大会のプログラムの中で行っていることとして、アイデンティティー継承、沖縄文化継承、ネットワークの発展を目的としたワークショップや次世代討論会などを実施しております。世界若者ウチナンチュ大会の比較表を添付しておりますので、各大会の目的や人数、成果等は資料をご覧くださいと思います。他、海外の若いウチナンチュのサポートをこれまで行ってきました。世界若者ウチナンチュ連合会からの報告としては、以上です。

(小川委員) 安里委員、どうもありがとうございました。第1回目からのものをまとめてくださって、非常に理解しやすい資料をいただき、ありがとうございます。次世代の継承について、世界若者ウチナンチュ連合会の取り組みとして、安里委員から発表していただいたものに関して、ご質問、ご意見等ございましたら、お受けしたいと思っておりますがいかがでしょうか。

(新垣秀彦委員) 説明ありがとうございました。行っている事業の中で、アイデンティティーの継承というのがあり、これは今回の本題のキーワードにも、アイデンティティーの低下とありますが、そもそもこのウチナンチュのアイデンティティーというのをどのように継承しているのか。もしくは、このアイデンティティーをどう定義づけされているのか。その点を教えていただきたいと思えます。

(安里委員) ご質問ありがとうございます。アイデンティティーの定義については、資料6の沖縄県の交流施策の資料(ページ3)にもありました、「ウチナーネットワークとは」というところと同じ定義としております。沖縄県民、海外及び県外に移住した沖縄県出身者やその子弟、そして沖縄が好きな方々、縁のある人々などを含めております。アイデンティティーの継承の仕方ですが、これまで大会を実施してきて感じていることとして、大陸ごとに課題を捉える必要があると考えております。例えば、南米、北米、ヨーロッパ、アジア、そ

れぞれ県人会の規模が違いますし、それぞれの国の社会、文化、お国柄が違います。若者大会のすごく苦労した点ではあるのですが、南米のウチナンチュと北米のウチナンチュと一緒にプログラムを作るとというのが、すごく難しかったです。南米といえばブラジルのサンバだとか、交流を通してすぐ繋がれる国ですが、北米ではそうはいかず、ディスカッションが好き。そういうわけで県人会レベルでアイデンティティーの継承を考えていくプログラムを作っていく必要があると考えております。

(小川委員長) ご説明ありがとうございました。

(新垣秀彦委員) ありがとうございました。

(小川委員長) その他、何かご質問、ご意見等ございましたらお受けしたいと思います。それでは、私から一つよろしいですか。今回の海外ネットワーク会議の課題の一つに、若者ウチナンチュの意識が非常に低下している、アイデンティティーの意識が低下していると、課題として書かれているんですが、安里委員の活動や、もしくは名桜大学の学生等々の盛り上がりを見ていると、必ずしもそうではないのかなと思うのですが、まず、安里委員ご自身は、この提示された課題についてどのようにお考えかということが1点。それから、もし、それが低下傾向にあるということであれば、これから4回続く会議ではありますが、安里委員としてはどういう形で、それを克服していくべきとお考えかというのを、お知らせいただければと思います。

(安里委員) 県内においてのアイデンティティー継承ということでしょうか。

(小川委員長) 両方ですね。どちらもご経験されていると思うので、二つに分けて、もしくは、まとめてでも構いません。

(安里委員) 海外において、特に私が移住したボリビアに関しては、アイデンティティーの低下というのは、そこまで感じていないです。理由として、ボリビアにはオキナワ村があるのが大きな理由だと思います。低下は感じないのですが、人口が減ってきているという課題はあります。他の南米においてもアイデンティティーの低下というのは、大きくは感じてはいないです。先ほどもご説明しましたが、大陸ごとにアイデンティティーの継承の方法を考えて、何が課題になっているのか、というのを掘り下げて考えていく必要があると思っています。

県内においては、2011年の第5回世界のウチナンチュ大会で若者組織を立ち上げて活動してきたのですが、2011年に比べると、県内の若者のアイデンティティーの高まりはあると思っています。県内でも、海外にウチナンチュがいるということを知っている若者が増えてきているので、そういった点では少しずつ広がりがあると思います。

(小川委員長) ありがとうございます。2011年に比べたら上昇傾向にある県内の若者ウチナンチュアイデンティティーの増加かもしれませんけども、それをどういうふうに継続、発展させていけばいいかというようなことは、今後いろいろ会議を通じて、ディスカッションしていければというふうに思っております。

では、安里委員どうもありがとうございました。

続きまして、WUB ネットワーク活用事例について、WUB ネットワークの佐久田トニー副会長から説明をお願いします。

(佐久田トニー-WUB ネットワーク副会長) 皆さんこんにちは佐久田トニーです。

皆さんの前に、資料9がありますが、こちらは、今までWUBのネットワークがどうやって設立されたか。97年に設立されて、23年になっています。ボブ仲宗根さんが作ったのですが、最初の考え方としまして、1899年の30名が沖縄を出て、そして26名がハワイに到着して、それからもう120周年になっている。沖縄県が母県ということで、沖縄と移民の皆さんが繋がっている。

でも移民の皆さんが、沖縄と繋がってはいますが、お互いに兄弟としてお付き合いがそんなにないということ、そう感じられているということ、ボブさんや皆さんも言っていたんですね。隣の国の皆さんが、ウチナンチュが隣にいるのかということも、あまり皆さん知っていなかった。皆さんはハワイまで行ったけど南米まで行ったという人たちを知らない。なのでハワイで、WUBで集まって、ハワイにも、南米にもウチナンチュがたくさんいるんですよということを見せていくということが大事。

でも、なぜこのWUBに、Bがついているのか。これはもちろん、経済面でちょっと強くないと、隣同士の繋がりができない。それはただもちろん文化なり、祖先なりという部分での繋ぐというのもとても大事なのですが、その中で経済面があって、そして横の繋がりがあって、ネットワークを繋げるということが大事だということで、それを続けられる。もちろんWUBも同じように、いろんな国々に行って、多くの県人会と会いながら、県人会の皆さんとの繋がりがということもやってきています。その中で、ビジネスのみならず、どうやってWUBが繋がっていけるかという部分も勉強している。いろんな事例が今あると思うのですが、先ほどお話していた、こちらの資料(資料6-②)にもありますが、チリメーサー。昨年、私たちはフロリダのオーランドで、WUBの会議をやりました。トマス技研のチリメーサーの説

明も、通訳を入れてやりました。そこで多くの人たちと見て、この機械はどういうものなのか。そして昨年はハワイに、チリメーサーを持って行って、ハワイの島々を回って、本当にコンパクトで、チリ、ごみが拾えてダイオキシンが出ない、という説明、ヘルプをしています。

そして、ここにいる柴崎さん(資料9 P9)。もともと東京から台湾に行って、台湾でビジネスを作って、そして地震の部分(地震検知システム)をペルー、ブラジルにおいても、WUBを通してコネクションができました。

そして、金秀さん、こちらにいらっしゃいますが、昔ゴルフ場を作るときに、バンガロー、沖縄になかったんですが、ハワイに行って、バンガローをこうやって作るんだというのを沖縄に持ってきて、またはその芝生を見て、こういう大きなゴルフ場の芝生があるということで、それを沖縄に持ってくるのか、いろいろなお金には直接 WUB の、私たちも皆さんボランティアなんですが、ネットワークの間を繋げていくということがとても大事であるということでもあります。

そして、最近「ポークたまご」さんの事例があります。「ポークたまご」さんが、昨年、私と数名で、ある新聞社に行ってそこで記事を見て、翌朝「ポークたまご」さんから電話がかかってきて、どうやってハワイに行けるんですか、という話をして、そこからトントントント、今年、「ポークたまご」のハワイ1号店ができました。あいにく今コロナの影響で、ちょっと厳しい時期になってはいますが、今お話したのは数件ですが、たくさんその事例がありますので、この WUB のネットワークをぜひ、多くの人たちと繋げていきたい。英語の business は、もちろん経済的なビジネスもあるんですが、私に関するものは、ちょっと興味持ちましょうという、It's my business. 新垣(誠)先生、どうやって言うんですか。

(新垣誠委員) 私に関わること。

(佐久田 WUB ネットワーク副会長) 関わること。それは私も皆さんと一緒にやっていきたいという部分のビジネスというのもあると思いますので、世界のウチナーンチュのビジネス、私たちに关わるものはぜひみんなと一緒にちむぐくるを通してやっていきたいという話があります。一番大事な点というのは、このウチナーネットワークを続けること、5年に1回、県が旗を振ってやることはとても嬉しい、とても大事なことです。7000名が前回の大会に集まりました。次は、8000名、9000名、もしコロナがなければこうやっていくと思うのですが、でも、持続可能な、SDGを言うのであれば、英語で言う consistency、一貫性がとても大事だと思います。毎年毎年毎年続けて、県人会の皆さんと連絡をする、県人会長が誰なのか、ウェブサイトはあるのか、Eメールはあるのかということ、続けて連絡することがとても大事かと思います。

そして民間大使というのも、何百と、たくさんいます。彼らの活用がされてない。私が聞いている範囲では、連絡は5年に1回あるかないか。任命されたということですが、民間大使も現地では、沖縄のために、沖縄のいろいろな文化のために、発展のために一生懸命やっているのですが、その後何をできるかということのを待っている。なので、(県から) 続けて連絡をすること、そして民間大使の皆さんから、いろんなアイデアを、いろんなバックグラウンドを持っていますので、ぜひそれを続けてやっていって欲しいと思います。

先ほど安里委員が話していましたが、次世代の皆さんは、多くの人達が現地で生まれて、もう五世になっています。五世の皆さんは現地人になっています。アメリカ人、ブラジル人になっている。そして、もちろんおじー、おばーが、ウチナーから、沖縄から来て、私は昔はそうだったと。でも私は今、スペイン語、英語で、ポルトガル語話している。なので、「おじー、おばーのことだよ、私には関係ないよね」ということを話す人たちも多いです。ハワイでも、南米にウチナンチュがいるの? と知らない人たちもたくさんいます。なので、それをどうやって見せていくか。今私たちが始めたのが、コロナの結果、どうやって世界のウチナンチュをつなげるかという部分で、Zoom 会議。Zoom を通して、今の新しいテクノロジーを使って、どうやって皆さんをつなげていくか話した結果、「# (ハッシュタグ) ウチナー1000」という取組を始めました。それは何かというと、今ひとつの Zoom で 1000 名まで可能ということで、目標は 1000 名の皆さんを Zoom で集めたいということ。第 1 回は 5 月 10 日 日曜日の朝、沖縄時間、朝 8 時、ブラジルは夜 8 時。第 1 回目は 80 名が集まりました。80 名の皆さんと色々な話をして、何を感じたかということ、WUB ではない、若い人たちもいながら、もちろん一世の方もいました。参加者からアンケートもとりました。参加者はアメリカが一番、州ではハワイ、そして次が日本、そしてブラジル、アルゼンチン、ペルーの皆さん。そして、出身地は那覇が多いです。そしてうるま市、中城、南城そして浦添。また、一番多かった参加者は三世。次が一世、二世、四世そして五世。一番食べたいウチナー料理は、沖縄そばが第一にきました。次がゴーヤー、テビチ、そして、ラフテーでした。こうやって多くのウチナーの皆さん、次世代の皆さんも繋がりたいというところを、今のテクノロジー、Zoom なり、そういう部分でも続けてやっていけば、繋がるかなと私は感じています。この「ウチナー1000」を来年に向けて、コロナ禍が続くのであれば、世界ウチナンチュ大会がないのであれば、前回来た 7000 名の皆さん以上に、私の考えは、世界で「ウチナー1000」をやりたいと思っています。2 回目は 6 月 28 日の日曜日で、スティーブ・ソブレロさん。WUB ネットワークの前会長。彼はハワイで不動産をやりながら、夜はアロハビールというものを作っています。ちょっと宣伝ですが、世界のユニクロで T シャツをアロハビールが出しています。日本では出ていないのですが、ウチナンチュがやっていますので、ぜひ皆さん、ユニクロに行ったら、買っていいと思います。彼をゲストスピーカーとして 20 分話してもらいました。コロナの中で、あまり情報が沖縄には

入ってきていないのですが、ブラジルでは、残念ながら、29名のウチナンチュが亡くなっています。沖縄県から、現地のウチナンチュに向けて、何かメッセージとかそういうのがあれば、元気になるかなと思います。お祝いのときだけ、声かけておいでおいでということだけではなく。もちろん首里城も大変なことです。WUBも皆さんも、世界のウチナンチュも、寄付してサポートする。でも、その時だけではなく、声かけて行って欲しい。昔は550頭の豚も沖縄に送られてきた。いろんなサポートを海外の皆さんはする。本当に沖縄のことをとても大好きで。なので現地に声かけて欲しいと思います。

そしてもう一つは、ウチナンチュの定義。血がウチナンチュというよりも、世界に沖縄大好き人間がたくさんいます。沖縄の血が入ってない人たちもいます。でも、沖縄大好き人間=ウチナンチュと呼んでもいいんじゃないかなと私は思っています。世界の空手家1億4000万人の皆さんは沖縄の土地に足を踏んだことがない。でも彼らは沖縄のことを、空手というところから学んで、沖縄大好き。空手のみならず、いろいろな文化なり、誰かと結婚した、ウチナンチュと結婚してウチナームーク(沖縄に来た婿)になったとか。まだ私も、基地の皆さんと、または学校、いろんな人たち、外国で住んでいる人たちもいます。彼らはネットワークには繋がっていません。でも沖縄のこと大好き、沖縄の卒業生、クバサキ・ハイスクールなりキングスクールなり、いろんなところで繋がっています。彼らの中でのメールを見ると、沖縄大好き。沖縄のあの道はどうだった？あっちの何々は良かったという、ずーっとそういう写真がどんどん出てくる。ただのネットワークというより沖縄大好きネットワークがたくさんいますので、彼らも一つのネットワークの中に、ウチナンチュとしてぜひ入れて欲しいと思います。

そして、来年もし大会があるのであれば、オンラインでの申し込みをやって欲しいと思います。前回は、県人会を通しての申し込みということで、県人会に入っていないウチナンチュが沖縄に入ってきて、チケットが取れなかったということもたくさんありました。今はインターネットの時代ですので、ぜひこれはお願いします。皆さんをハッピーにして欲しいと思います。みんながハッピーになると、沖縄からの、ウチナーのちむぐくるが繋がっていくと思っていますので、よろしくお願いします。

(小川委員長) いろいろとためになるお話もたくさん盛り込まれたご説明でした。ありがとうございました。今の佐久田トニー副会長に対する、ご質問やご意見等ございましたら、承りたいと思いますがいかがでしょうか。

(新垣秀彦委員) 質問ではないのですが、非常に共感するところが多かったと思います。先ほど安里委員にも、ウチナンチュのアイデンティティーの定義を聞いたときに、安里さんも、沖縄が好きな方というような表現をしたと思います。今、佐久田さんから、(沖縄の)

血が入っていない人でも、多くの沖縄のファンがいる、そういう人をこういうネットワークに入れる必要があるのではないかと。非常に私も大事じゃないかなと思います。それについては、この表の中に、ワールドウチナーネットワークというのがありますが、おそらくこれはもともと、移民で行った方々が、そこで生活して、そこから積み上げてきた数だと思います。この中に、ワールドワイドウチナーネットワークを作るなら、全体を俯瞰できるなら、140万あまりの沖縄県民、もしくは、東京なり本土にいる沖縄出身者。そして、沖縄好きな人々。そういう方々も入れつつ、ネットワークを拡大していき、いろいろな経済的なビジネスではなくて、関わることのビジネスというのが広がるのかなと思いました。以上です。

(小川委員長) すてきなご意見ありがとうございました。

(佐久田 WUB ネットワーク副会長) 追加でひとつ。ウチナー1000のズーム会議は、次は8月30日の朝8時にやります。皆さんもお時間があればご参加ください。私はずっと来年までも続けていきたいです。ウチナー1000が1000名集まったら、ブラジル1000、ハワイ1000、日本1000、アメリカ1000と、1000名をどんどん集めていけば、世界のウチナー1000が1万人2万人以上のZoom会議になる。来年、もし集まらない状態になれば、このZoomでの一つの集まりが絶対できると思います。思いますというか、できます。年寄りの、参加されたいという人たちも、足腰ができないという人たちもたくさんいます。Zoomを使えないという人たちでも、娘さんが出てきてZoomをポチポチして、開けてもらったという、とてもハッピーだった人たちもたくさんいますので、こうやって沖縄から繋がるということも、ぜひやっていきたいなと思います。いつかは、ぜひ知事も出てもらって、みんなに声をかけてもらえればなと思います。来年の部分も、アイデアとして、私は続けてやっていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

(小川委員長) 追加のご説明ありがとうございました。他にございますでしょうか。では、私からよろしいですか。

この、#(ハッシュタグ)ウチナー1000、というものが、1回目が5月10日、2回目が6月28日、そして8月30日ということですが、2回終えた中で、最初、5月10日に参加する方はどんな感じで、そこに入ったのか、繋がれたのか。そして、議題という堅苦しいことじゃないかもしれないんですけど、どんな形で、期待を持ってそこに参加されたのか、そのあたりをご説明いただければ。

(佐久田副会長) ありがとうございます。5月10日でやってみようと。多くの皆さんがコロナでお家にいる、外に出られない。特にブラジルやハワイではロックダウンとなり、そう

すると、皆さん家にいろいろなストレスとかそういうのを抱えています。そうすると、ウチナンチュとして、どうやってつなげられるのか、沖縄から WUB としてどうやって何ができるんだろうかということで、何名かと話して Zoom をやってみよう。Zoom という新しいテクノロジーを、新しくないんですが。私は、今年初めてやって、とても素晴らしいものだ。それを使ってみて、現地の方に、WUB のネットワークを通して声かけましょう。ネットワークのみならず、友達、県人会の友達、ウチナンチュの友達、沖縄好きの人たちに声をかけてみました。そうすると、この時は、ニュージーランド、シンガポール、台湾、関西、沖縄、東京、そして、ハワイ、ロサンゼルス、フロリダ、そして、南米はペルー、アルゼンチン、ボリビア、そしてブラジルから参加しました。メインの名前に、自分の名前と出身、今どこから、そして、何世という形で入れてもらいました。そうすると、あなたはボリビアの何々ね、あなたはブラジルの、あなたはハワイの一世ね、二世ね、比嘉さんですね。皆さんで見て、そして、部屋を回って行きました。どこの誰ですか。いつ行ったんですが、どうですか、今は。という形で回って、皆さんに、沖縄のゴーヤーを見せたり、沖縄そばを見せたりと。どうやって皆さんと繋がるかというアイデアを皆さんと出して。1 時間だけです。長く引っ張るということでもなく、皆さんと、楽しい時間をちょっとやってみよう。英語と日本語でしかやりませんでした。もちろん現地ではスペイン語、ポルトガル語。名桜大学に行っている、我那覇先生、ペドロ・我那覇さん、ペルーから来ているんですが、スペイン語、ポルトガル語ができますので、彼の通訳を少し入れながら、皆さんとやった楽しい 1 時間でした。皆さんから 2 回目開催の希望があり、またやりました。最後は、自分が持っている大好きな飲み物で乾杯しました。

(小川委員長) コロナでストレスをおそらくみんなが抱えているから、盛り上がりようという発想から、まずは始まったという感じですね。ありがとうございます。その他何かございますか。特にないようでしたら、それぞれの取り組みの事例報告について今皆さんに、県の方から、そして安里委員、そしてトニーさんからございました。ここで十分ほど休憩時間をとって、再開後に委員の皆様のご自由討議をお願いしたいと思います。

(休憩)

(小川委員長) では 10 分の休憩終わりましたので、皆様のご自由討議の時間といたしたいと思います。約 30 分ほどになるかと思っておりますけれども、皆様方に、疑問に思っていること、是非ともここで意見交換したいこと、何でも構いません。お願いしたいと思います。その前に、休憩の前に、# (ハッシュタグ) ウチナー1000 という形で Zoom 会議等々で繋が

る機会の紹介がありました。つい数日前に若者ウチナーンチュ連合会でも、Zoom 会議を行ったというようなことが、新聞の方で報道されておりました。おそらくその仕掛け人の1人である、安里委員から、どのようなお話だったか、かいつまんでご紹介していただければと思います。

(安里委員) 若者の Zoom 集会は、トニーさん(佐久田副会長)たちが行っている WUB ネットワークから生まれ、プロジェクトを若者でも盛り上げようとい行いました。世界若者ウチナーンチュ連合会の理事でもあり、WUB 沖縄事務局の玉城りなさんがオブザーブで本日参加してくれていますので、中心として関わった彼女から内容の紹介をしてもよろしいですか。

(小川委員長) 安里委員からのご指名なので、すみません、よろしく願いいたします。

(玉城りな氏) WUB 沖縄事務局の事務局長をしております玉城と申します。私は若者ウチナーンチュ大会の理事もしております、WUB で、ウチナー1000 をやっていることを聞いていたのですが、若者でも何かやってみた方がいいんじゃないかという話になり、ウチナー1000 にも参加させていただきました。やはり幅が広く、一世から五世までというところで、若者からは、こんなに年配の方たちもいるんだと、ちょっとびっくりしたという声も聞こえたので、若者バージョンもやってみて、ウチナー1000 につなげていければと思い、6月28日頃にやり、今まで2回やっています。若者の方は、どちらかというところと交流というところに重きを置いており、まずはその地域の代表となる、メンバー約11名とどうしたことをした方がいいか会議を持ち、そこからアイデアを募って、クイズ大会やお絵かき、ジェスチャーゲーム等で、若者の輪を広げるということをやっております。また9月に一度やろうという話をしております。若者の方も、アンケートを取りましたが、やはりこの時が一番楽しかったという声が多く、参加者は三世から五世が多いです。以上です。

(小川委員長) ありがとうございます。大体何人ぐらい参加されましたか。

(玉城りな氏) 80 から 90 です。150 ぐらいいくかと思うんですけど。大体 80、90 どまりです。

(小川委員長) ご説明ありがとうございました。何か追加説明ございますか、安里委員。

(安里委員) 大丈夫です。

(小川委員長) はい、ありがとうございます。今回の会議の課題の一つが、ウチナンチュの意識、アイデンティティーの低下。アイデンティティーとは何ぞやっているところもあるかと思えますけれども、ただ、ウチナンチュとしての意識、もしくは沖縄大好き人間、沖縄のことを語ろうという企画に対して、先ほどの話にありましたように#ウチナー1000でも、もしくは、若者ネットワークのZoom会議でも、盛り上がりがあるような感じなので、深刻な課題ではないのかなというふうには思ったりはいたします。

では、自由討論になりますが自由討論の中身は、今まで県からのご説明があった内容に関して、もしくは、WUB ネットワークの試み、そして、若者ウチナンチュ連合会の試み、等々に関する意見でもいいですし、ご質問でもいいですし。自由に討論を繰り広げていきたいなと思っております。その中で忘れてはいけないのは、皆さん、お手元にある、式次第の入った一番最初の資料の、資料4と書かれている部分。これが、今回私たちが会議で、皆さん召集を受けてですね、たどっていかねばならないシナリオの大きな骨子だと思っております。そういうことも踏まえまして、皆様方自由に討論していきたいと思っております。

では、佐野委員お願いします。

(佐野委員) すみません、大変僭越ながら、21世紀ビジョン基本計画の総点検でも、私は、国際協力・交流ということで、ちょうどこのテーマのところにも関わっていたので。その時から思っているんですけども、今日改めてこの資料4を見て、ネットワークの拡大というのは、所与のものとされているのですけれども、そもそもネットワークは何のためかというのを、この会議がこれから議論をして、最後に知事への提言をまとめるにあたって、もう1回確認しておいた方がいいのかなと思っているんですね。ここからスタートするというのももちろんやり方としてはあるんですけど、スタートするにあたってもう1回、ウチナーネットワークの拡大、ネットワークとは何のためなんだろう、ということですね。先程、安里委員からも「繋がりたい」というお話がありましたけど、繋がりたいというのは何のためか。ずっと今日お話を伺っていて、繋がりたいという人と、ネットワークを使いたいという人と、そのネットワークの目的がもしかしたら違うかもしれないなと、思ったんです。例えばWUBというネットワークがあって、それを使ってビジネスしたいという人もいれば、そもそも、WUBに入って交流したい、繋がりたいという思いの人がいる。それぞれそのネットワークの目的が違ってくるんだと思うのですけれども。そもそもネットワークというものの自体を継承したり、拡大しなければいけないのかというところをもう一度確認したいなと。例えば沖縄の文化をアピールするとか、歴史を伝えていくためにネットワークが必要なんだとか。そこを確認したい。そうでないと、先程もウチナンチュの定義というのがありましたけれども、資料4のテーマの方向性とか、文化観光スポーツ部の資料にあった課題というのは、それ自体は県系人に関することばかり課題になっています。意識の低下とか、世代交代とか。

でも、ウチナンチュネットワークは沖縄大好き人間も入っていいということになっているので。ネットワークそのものについての認識を確認したい。多様性があってもいいのですが、ネットワークは何かというところを皆さんの意見を伺って、こういうものだねというのは共通理解にしておきたいと思っています。

もう一点。佐久田さんからのお話にあったと思うんですけども、情報の整理。県人会会長だけじゃなくて、例えば子弟留学とか、人材育成に参加した人のリスト、データベースも、整えておいた方がいいんだろうなと思っています。その人たちが結局次世代を引っ張っていく候補にもなるわけです。県もいろいろやっておられますし、私ども JICA も日系研修をやっているのです。同じ人が何回もいろいろなスキームで、沖縄にいらしたり、留学したりとかしていて、それはそれでいいと思うのですが、その中で次世代を引っ張っていく人が出てくると思いますし、いろいろな研修を受けるときに、同じメニューじゃなくて、少しずつアレンジすることで、よりリーダー育成にもなっていくと思うので。そういう人材のデータベースというのは、例えば県とか、うち (JICA) などが協力し合いながら作っていくということも必要なのかなと思いました。まずはちょっとキックオフで二点。

(小川委員長) どうもありがとうございました。非常に大切な点をご指摘していただいたと思います。大きく二つあったと思います。一つは、ネットワークは何のためなのかっていうのをちゃんと共通理解して進まない、2 回目 3 回目 4 回目と、方向を見失ってしまうのではないかというメッセージだったと思います。ネットワークは何のためっていうものの中に、今日の県からの発表、そしてそれぞれの活動先からの報告がありましたけれども、繋がっていききたい、それが目標なのか、何のためか。それとも、そのネットワークを使うというのを目標にしているのか。その辺り、多様性があっていいというお話の前提の中で、私たちはどちらの方向に向かうのか。もしくはすべてを、いくつかをカバーするのかっていうところはちゃんと確認をしておかなきゃいけないと思います。

もう一つは、人材のデータベースですね。そういったものを整理することの大切さをご指摘されたと思います。どちらも非常に大切なご指摘だと思います。

例えば私の専門は公衆衛生学ですが、そこでは「健康日本 21」という、21 世紀の健康のために日本がどう動いていかなきゃいけないかという施策があるのですが、それぞれの県が、市町村が現場に即した数値目標を策定しているんですね。例えば、現在この地域では肥満率が何%のところを半数の何%に下げるといった数値目標を作ると、可視化しやすいというのは確かではあります。ただそのような数値化が今回の海外ネットワーク会議にすべて適しているかどうかというのは、考える必要があると思います。ただ、今、数値で示せる課題がわかっているのであれば、例えば、ウチナンチュ意識のアイデンティティーの低下と言いますけれども、これは何のデータに基づいて低下と言っているのか、そして、その基礎データ

をどの程度改善したいとか。このように何かわかりやすい数値目標が設定できるといいですね。でも設定するためには、ベースラインデータ、つまり基礎データといった、現状が数値化されている情報が必要です。それが現在あるのか、もしなければどうするかといったことを思いながら、お話を伺っておりました。

他にいかがでしょうか。今、佐野委員からご指摘があった点でも構いませんし、それ以外でもよろしいです。

(新垣旬子委員)

冒頭の挨拶で簡単ながら『役に立ちたい』と申し上げました。来年開催予定のウチナンチュ大会が、来年で30年を迎える節目であるということ。そして、WUBが設立され20年が経過しているということ。これらを踏まえて、今後の沖縄に寄与することを目的とした、沖縄と海外を繋ぐネットワークを加速させるための検討において、貿易会社としてこれまでに重ねた海外とのビジネス・交流の経験が少しでも役に立ちたいと思ったところです。

さて、先ほどの佐久田さんのお話を伺っていましたが、世界ウチナンチュ大会が行われていることは存じ上げておりましたが、大変恥ずかしながら『世界ウチナンチュ大会に沖縄県民として参加しましょう』と呼びかけられている意識はありませんでした。ウチナンチュ大会は、海外在住であるウチナンチュのために開催されているものと認識しておりました。長年活動をしてきていることを知っているだけに、海外から帰ってきてくれたウチナンチュに、私自身が県民として何もできなかったことを申し訳なく思います。ロサンゼルス在住で、舞踊の先生をなさっている友人が、舞踊の大会が沖縄で開かれるということで沖縄へ帰って来たり、そのご息女が沖縄へ留学に来た際など、日頃から親交を持つ海外に住むウチナンチュを迎え入れたり、時間を共に過ごす事があります。しかし、ウチナンチュ大会は、県主体となって行っている事業であり、一般県民にとってどのような関わりがあるのか、見当がつかず疑問が残ります。

次に2点目として、『ウチナンチュ』の定義について、『沖縄が大好きな人=ウチナンチュ』というのは腑に落ちないところです。例として『沖縄友の会』や『ウチナー大好き会』なら理解できます。シンプルに、『沖縄の血が一滴でも入れればウチナンチュである』など区切りを持たない場合、対象が広くなりすぎて、本会の議論の中心となるべき点が曖昧になるのではないのでしょうか。会議体として、議論の方向性をどこへ向けて進めていくのか、今一度考える必要があると感じています。

私は貿易会社を経営している一方で、県貿易協会の会長を務めてさせていただいています。多くの方と日々接することとして、ネットワーク作りはビジネスの基本であることは理解します。その中で、「私と繋がる」、「ビジネスとして繋がる」、そして「経済と繋がる」等、ネットワークといえど、目的別にどこと繋がる事が、どのような結果をもたらすのか、又は得

られるのか等、目的別に『出口』が異なってくるのを目の当たりにしています。今回含め、次回以降開催される会議の目的を明確にした上で議論を重ね、各委員の意見がまとまり最終的に提言へと移行できればと思います。

(小川委員長) ありがとうございます。今大切なご指摘ありました。まず、今まで世界ウチナンチュ大会があるということはわかっていたけど、それが県民、もしくは県に住む人達が参加できるのか。参加して欲しいのか。そのあたりの意思というのがあまり県民には伝わってこなかったという点。

それから、ウチナンチュの定義に関しては、沖縄大好き人間、つまり沖縄の血が流れていない人であれば、沖縄友の会というふうに分けたほうがいいのではないかとということ。そしてこの会議の中では、ちゃんと達成目標みたいなものをしっかり設定するべきだということ。

(新垣旬子委員) はい。例として、『泡盛愛好会』や、『沖縄友の会』のような沖縄大好き！と仰ってくれる方々の集いや会は嬉しい限りですが、「ウチナンチュ」という区切りとは異なると思います。

(小川委員長) 貴重なご意見ありがとうございます。おそらく、新垣(誠)先生、いろいろと温めていらっしゃるんじゃないですか。よろしいですか。

(新垣誠委員) ありがとうございます。今おっしゃる通りかなと思います。そもそも、第1回目のウチナンチュ大会が始まった時は、当時の西銘知事がカナダの県人会のところに行って、もてなしを受けて、非常に感動して、そういう海外に移民して行った人たちのちむぐくるに触れたみたいな感じで、そこから実はこのネットワーク事業とウチナンチュ大会が始まったという経緯があって。あの頃っていうのはおそらく、まだ皆さん沖縄県民の中に繋がりが、個人的な繋がりがあつた人がいっぱいいたんですよ、親戚がいたとか。だから、帰ってきたら帰ってきたで、皆ワーツ集まって、自然にですね。どちらかというと県の方もそこまで県民参加っていうところ強く押しはなかったような気がします。あの時は、正直言って県民の、いわゆる県の立ち位置としては、海外に移民に行って、その後もすごい、自分たちお世話になったんですよ、海外のウチナンチュに。その労をねぎらうというのが一番大きかったのかなっていう気がします。あれから、もう第7回を迎えようとしている今ですね、おそらく目的も変わり、社会環境も変わりっていうのが、非常にあるんじゃないかなというふうに思います。

それで、先ほどありましたようにネットワークやアイデンティティーの話がありますが、ウチナンチュのアイデンティティーの希薄化って話がありましたが、これは誰が発題して

いるのかなというのは気になっていて。おそらく県人会の重鎮の方々が若い人を見て、自分たちと違うなということを描いているのかなと。これ沖縄戦の継承というのと何か似ているような気がして。もともと移民した当事者の方々のアイデンティティー。例えば北米でいえばその後、戦争体験した二世の方々、収容所を経験した方々のアイデンティティー。そしてその後、80年代、60年代後半のいわゆる公民権運動とかで、そのいわゆるアイデンティティー意識とかの、もう一回盛り上がりを見せた三世の方々、アイデンティティーってみんな違うとっていて。それぞれ個人に属しているので。おそらく（佐久田）トニーさんのウチナンチュとしてのアイデンティティーと、自分（新垣誠委員）のウチナンチュとしてのアイデンティティーはおそらく違うと思うんです。

なので、まずそのウチナンチュのアイデンティティーを継承するという表現自体が、ちょっとどうなんだろうなっていう気がします。その世代世代で住んでいる社会関係は違う。先ほど（安里）三奈美委員からありましたけれども、その地域によって、社会環境や歴史、環境も違う。そうなってくるとおそらくそのアイデンティティーってのは非常に、多様であって、自分がウチナンチュであるっていうことはどういうことなのかっていうのは、おそらくすごいいろんなバージョンが存在するのかなというふうに思います。

先ほど血の話がありましたけども、これも、どこで線を引くかっていうのは非常に難しい話で、ウチナンチュの血が入っていても、全く沖縄のことなんとも思っていない人も実はいて。でも（佐久田）トニーさんもお存知ですが、ハワイだと、ウチナンチュアットハートっていう表現があって、気持ちの上でウチナンチュだっていうのがあって。何を表明していくか、いわゆる精神的な部分っていうのが、あるのかなという気がします。WUBの2代目の会長の与那嶺さんとか、ブラジルの、いろんな海外の、昔の世代のウチナンチュの方の話を見ると、ウチナンチュって何ねって話をすると、やっぱりちむぐくるの話をしますよ。助け合い、相互扶助の話。でもしょうがないかなと。海外に出て行って、あの時代に移民で出て行って、非常に大変だったんですよ。ビジネス立ち上げるのも大変だからみんなで模合したりとか、葬式一つするのもお金がないから字会でみんなでやったりとか。そういう助け合いの互助会的なものが、各県人会の基礎になっていて、おそらくその気持ちみたいなのが継承されている人たち、というのがいわゆる海外でウチナンチュという話なのかなと。非常に難しいのは、先ほどの（安里）三奈美さんの話もそうですけど、いろんな地域で多様な環境を迎えていく中で、自分たちがそのアイデンティティーというものを、誰が規定する権限があるのか。それやってしまうと非常に危険だなと気もして。やっぱり、いろんな人達がいるという多様な部分と、そもそもこのウチナンチュネットワークがなぜできたのか。というのは移民の歴史なんですよ。移民の歴史っていうのは、沖縄、日本全体もそうですけども、やっぱり受難の歴史であり、やっぱり出て行った人々の苦勞があり、苦勞の中でお互いを助けようという精神ができ上がっていった。沖縄県もそうだと思います。

戦争を体験し、その前の貧困もそうですし、琉球処分からずっとあると思うんですけど。そういうのを経験して、沖縄自体もお互い助けあえないと、やっていけないというところから、いろんな、ゆいまーる精神とかいろんなものがでてきて、県内の。そういうのが共有されるときに、何らかのネットワークみたいなものもわっと出てくるのかなと。例えば客家とか、いわゆる華僑の方々のアイデンティティーっていうのはやっぱりその血であるとか、出身地であるとかっていうもとの、その信頼関係が強くでき上がっているじゃないですか。となったときに、じゃあ、沖縄の、ウチナーのネットワークの根底にある、人間関係、信頼関係の本質って何なんだろう、というのを一つ考える必要があるのかなと。英語の remember といいますけど、re は再び、member というのはもう 1 回自分たちの仲間に加えるっていう意味は、おそらくその思い出す、想起するっていうことかなと思って。そもそも、このネットワークはどうやってきたのか、その起源。そもそも県と移民のコミュニティの人たち、県があれだけお世話になって、私たちが。それに対してウチナーンチュ大会っていうのが、それのお返しだとか。例えばハワイだと、県人会館の建設の時に、こちらからお手伝いするとか、瓦送るとか、いろいろあったと思うんですけど。そういう助け合い、というものが非常に大きな、それがまたこの国際的なものになっているところが非常に沖縄の特徴っていうか、他の県にはない、沖縄の、うちなーびけーん（沖縄ならでは）の、一つあり方かなと思います。一番初めのネットワーク事業が始まったときも、国際協力、国際貢献っていうのが国際社会から日本が問われた時に、沖縄は何ができるのかっていう話で、沖振計（沖縄振興計画）の中でもよく言われていますけど、我が国の南の国際交流の拠点ということで、そこで言われたのが、万国津梁であるとか、いわゆる大貿易時代だとか、そういう話なんですよ。なので、それを考えると、私たちが多様性をどれだけいろんな人にずっと受け入れていって、今経済産業省が必死になってダイバーシティマネジメントってやっていますけども、ビジネスを行う上でもそうですし、人々の出会いもそうですし。お互いが相互理解してこれから一緒に共生していく上で、その多様性をどうやって受け入れていくか。それが試されている気がします。なので、この先ビジネスをやっていくにしても、先ほど佐野委員からありましたけども、それを求める人、それをどう使いたい人、というのがあると思いますけども。やはりその中でもこの多様性っていうもの、沖縄県、私たちも、それをどうやって受け入れていって、または理解して、共に生きていけるのか。そういうのが、今回のネットワーク（会議）で非常に試されているのかなと受け取っております。

（小川委員長）ずっと温めていたことを、皆さんにご紹介していただきありがとうございます。確かに、アイデンティティーというのは、一つに統一できるものではなく、同じウチナーンチュの中でもアイデンティティーっていうのは、それぞれの思いは違うというのは、なるほどだと思います。個人に属しているというようなお話。で、じゃあその多様性の中で、私

たちはどういふふうに定義し、この会議の中で、何を求めていくのかっていうこともきちんと再検討するべきなのかなっていうふうに思います。

あと、第1回目の世界ウチナーンチュ大会っていうのは労をねぎらうために開催されたっていうような背景は、私は知りませんでした。そういうことの中で、今回、第6回を終え、第7回、どういふふうに変化していくのか、もしくは、それを基調としつつ、発展していくのかっていうようなことも、提言の中に入れられたらいいなっていうふうに思っております。もう時間になりましたけれども、今回、県の方からまずは説明、この会議の趣旨の説明、そして、実際に活動されている方からの、安里委員、(佐久田)トニーさんからのご説明があり、そしてそれぞれのお立場の背景を持ちながら、どういった努力、もしくは貢献ができるかっていうようなことを、次回の会議までにそれぞれ温めていただける時間があれば、嬉しいなと思っております。

一つ、今回の海外ネットワークの、ネットワークというキーワードのポイントなんですけども、先ほど佐野委員がおっしゃられましたように、繋がりを重視するのか、使うのを重視するのか。もう少しざっくり言ってしまうと、文化を重視するのか、文明を重視するのか。精神的な世界を重視するのか、もしくは、市場、マーケットというような物質的な世界を重視するのか。もしくは、両輪で行くならどの程度、みたいなのところも、やはりきちんと定義づけて、この会議では進めていきたいと思っておりますので、その辺りも、次回までに皆さんのご意見を伺えれば嬉しいと思います。

(新垣秀彦委員) 先ほど佐野委員からもあったんですけども、この会議の目的。確かにここに書かれた課題があります。私の考えとしては、21世紀ビジョンを今進めています。沖縄県の将来のあるべき姿、その中で五次に渡る振興計画の中で、総括をされて、点検をされました。その中で課題がこれだったと思うんですね。そしてこの一番上(資料4)にあるように、万国津梁会議における、有識者の提言の上に矢印があって、世界に開かれた交流と共生に関する新時代沖縄の構築というところで、もう一つ資料があって、アジア経済戦略課の方からも説明されていると思います。

この会議が年内で終わるのか、次年度もやるのかわかりませんが、事務局へのお願いとして、今回、第7回のウチナーンチュ大会に向けての何らかの整理がありますよと。今後は、海外のネットワークをいかに、ウチナーンチュを核としたネットワークを深めて、どのような、沖縄経済が自立してくかっていう道しるべを、全世界のウチナーンチュもしくはその関係者を使って構築していくかっていう、最終ゴールもあると思うんですね。そういう意味では、例えば、小目標、中目標、大目標、そういうふうに整理していただいて、2回目、年度内は、ここぐらいまで話していただきたいとか、そういうのがあれば、論点もはっきりするんじゃないかなということが1点。

そしてもう一つ、今我々が課題を解決するために、これは次回にも、委員の皆さんの話を聞きたいんですが、沖縄に暮らすウチナンチュの責任。先ほどもありましたけど。世界のウチナンチュ大会は世界から来た人のものだけなんだというような、そういう、まだ理解ができてないところもある。そこで沖縄にいるウチナンチュの責任は何なんだと。そして世界のウチナンチュの中心として、沖縄が本当に核とした、今後、責任を持っていけるのか、そのあたりも、この万国津梁会議の中では、議論してもいいんじゃないかなと思いますので、そのあたり、次回、県の事務局にはですね、この目的に、少し明確にさせていただければと思いますので、よろしくお願いします。

(小川委員長) 貴重なご意見ありがとうございました。

(新垣句子委員) 私の先の発言において、少し『血』について触れました。新垣(誠)先生が仰ったように、ウチナンチュという定義やアイデンティティーを、「地域」や「血」、又は「沖縄好き」等、ある一定の区切りや視点で整理し、焦点を絞っていく必要があると感じております。現在の社会には多様な観点や切口があります。本会議の目的や道筋を明確にすることで、各委員の熱い思いや意見が集約され、より良い提言へと向かうものと思っております。

(小川委員長) はい、わかりました。他によろしいですか。大丈夫ですか。

今、新垣(秀彦)委員の方からありましたように、まずちょっと県の方で、目標、これを達成するための会議というような、それが可能であるか、どうなのか。希望だけでも構わないので、どういうところに落としどころ、一番中心点として持っているのかというようなところを少し明確化していただきたいというようなことがございました。よろしくお願いします。

あと、私の方から、今回課題として出ている、この4点。もし可能であれば、何を根拠にこのような課題が出てきたのか、その根拠を明らかにして、もしそれが数値化されているのであれば、その数値もお見せしていただければなというふうに思います。

そうしますと、これは低いよね、では、これをもう少し、ここまで上げようっていう、ちょっと具体的な目標になるのかなっていうふうに思ったりします。

そして、委員の先生方は、もしこれが課題だとしたら、それぞれこの4項目、どうすれば、この課題に対して、タックルできるかっていうのかな、向上することができるのかっていうのを、それぞれちょっと、提案できるようなことがあれば、次回お聞かせいただければなというふうに思っています。もしこれが本当であれば、この課題が本当に深刻であるとすれ

ば、どういうふうにしたら、それを解決できるのかっていうことですね、そちらの方も考えていただければというふうに思います。

そして、本日、委員の皆様から出されたご意見を踏まえ次回の会議では、委員の皆様からそれぞれ 10 分程度のご意見、ご提案をいただきたいというふうに、思っていますので、先ほどの課題四つの解決策プラスで、ぜひとも、それぞれのご意見ご提案をいただければと思います。

また今後、知事にどのような提言を持って行っていくのか、委員の皆様と情報共有しながら事務局とも相談の上、進めていきたいと思っております。

では最後に事務局から次回の日程調整等について説明がございます。事務局からよろしくお願いたします。

(事務局) 本日は、お忙しい中ご出席いただきましてありがとうございます。今回の万国津梁会議 1 回目の議論を踏まえまして、県の方で、もう少し議論しやすいように、議論の方向性を明確に絞って、対応させていただきたいと思っております。

海外の方では、アイデンティティーの低下が見られないというお話がございました。むしろ、その課題は、我々沖縄県民、今沖縄に住んでいる我々にあるのかなというのを実感しております。委員長からもありましたが、指標ですね、参考になるかと思っておりますが、10 月 30 日を、沖縄県で世界のウチナーンチュの日として制定しました。これは第 6 回のウチナーンチュ大会のときに翁長前知事が宣言したものでございます。世界のウチナーンチュの日の、県民がどのぐらい認識しているかということを毎年調査していますが、昨年度は 40%しかございませんでした。沖縄県としては、沖縄振興計画の最終年である、令和 3 年度に 60%という目標を掲げており、そこに向けて、高めていきたいと考えてはおるんですけども、この万国津梁会議がその一助になればと考えておりますので、今後も皆さんのご指導をお願いしたいと思います。

本日の会議につきましては、冒頭、委員長からありましたように、県のホームページで公表していきたいと思っております。また皆様からのご意見につきましては、県で再度整理しまして、次回の第 2 回会議で提示したいと考えています。

次回の日程は、案にありますとおり、9 月上旬から中旬あたりを予定しておりますので、改めて各委員の皆様にご連絡しまして、具体的な日程等を調整させていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

それでは以上をもちまして、第 1 回目の万国津梁会議を終了させていただきたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。